

オイラト  
衛拉特方言を含む。狭義には、新疆ウイグル自治区の  
オイラト方言、および、彼らの用いる「オイラト文語」  
(後述)をさすことがある。

オイラト (オイラート, オイラットとも) は、西部  
モンゴル諸部族の総称で、主な部族としては、

トルグート (torgūd, 土爾扈特)

チョロス (tsorōs, 綽羅斯) 別名, ジュンガル  
(zūngar, 准噶爾)

ドルベト (dörwöd, 杜爾伯特)

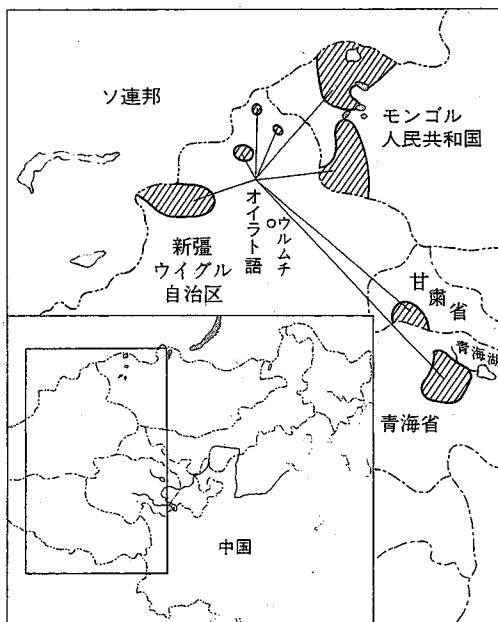
ホシュート (xošūd, 和碩特)

コイト (xöid~xöd, 輝特)

等がある。これらは、17世紀末、天山、アルタイ両山  
脈間の<sup>ジュンガル</sup>准噶爾盆地 (ジュンガリア Jungaria) を中心  
として、その興亡にともなう移動と分散をくり返し、  
現在では、西はカスピ海西岸から、東は中国内  
蒙古自治区の西部に至るまで、ソ連、モンゴル、中国にまた  
がる中央アジア各地に点在している (く図>参照)。

オイラト系の言語、諸方言は、分布地域の広大さ  
にもかかわらず、言語的には、音声面においても、文法・  
形態面においても、きわめて均質的で、内部の差異は  
わずかである。しかも、オイラト系諸部族の間では、  
学問僧ザヤ・パンディタ (Za-ya Paṇḍita) が、1648  
年に伝統的な縦書きのモンゴル文字を改良して考案した  
「トド文字」による「オイラト文語」を書き言葉と  
して、今世紀初めまで用いてきたが、これが仏教 (ラ  
マ教) とともに、オイラト諸部族の文化的な求心力と  
して作用してきた。しかし、現在では、ソ連邦カルム  
イク自治共和国ではロシア文字に基づいた文章語 (カ

〈図〉 オイラト諸方言の分布



オイラト語 英 Oirat, 露 ойратский язык,  
中 衛拉特語 (wèilātè-yǔ)

【概説】 モンゴル諸語のオイラト系の言語、方  
言の総称。ソ連邦カルムイク自治共和国のカルムイク  
語、モンゴル人民共和国西部のオイラト系諸方言、お  
よび、中国新疆ウイグル自治区、青海省、甘粛省等の

ルムイク語)を発達させ、モンゴル人民共和国のオイラト系住民の間にはハルハ方言を基礎にした文章語(モンゴル語)が普及し、また、中国の新疆ウイグル自治区ではトド文字による「オイラト文語」が用いられており、さらに、中国の他の地域では内モンゴル語の書き言葉である蒙古文語が用いられている、というように、もはやこれらの間に、社会的、文化的なまともりは存在しない。

さらに、オイラト系の言語、諸方言は、モンゴル人民共和国のハルハ方言や中国内モンゴル自治区の内モンゴル諸方言と言語的な隔たりが少なく、それぞれの言語による相互理解も困難でないことから、モンゴル人民共和国のオイラト系諸方言はハルハ・モンゴル語の方言として、また、中国内のそれは内モンゴル語の1方言とみなされている。これには、両国におけるオイラト系諸方言に対して、ハルハ・モンゴル語や内モンゴル諸方言の干渉がそれぞれ進んでいることが関係している。唯一、ソ連邦カルムイク自治共和国のカルムイク語は、単一の言語共同体として独自の文章語を発達させており、1つの独立した言語とみなされる。

**【言語的特徴】** 上述のように、オイラト諸方言は、モンゴル語族の中で、ハルハ・モンゴル語や内モンゴル諸方言と比較的に近い関係にある。それらと比較して、オイラト諸方言に特有の主要な言語的特徴をみると、まず音声的には、

1) 後舌円唇母音の系列 (u, o) に対して、前舌円唇母音の系列 (ü, ö) をもつが、それらは次のように、狭、半狭で、典型的な前舌-後舌の対立をなす。(カッコ内は IPA 表記)

	前舌	後舌
狭	ü [y]	u [u]
半狭	ö [ø]	o [o]

また、後舌非円唇母音 a [ɑ] に対して、前舌非円唇母音 ä [æ~e] を独立の音素としてもつ。

第2音節以降の短母音の弱化的程度が著しい。すなわち、第2音節以降に現われる短母音は、いずれもきわめて短く、調音も弱化的に中性母音に近い(e[ə~e])、

ündəsən [yndəsən]	「根」
ködölməš [ködölməš]	「労働」
xurden [xurden]	「速い」
olən [olən]	「多くの」
ämən [æmən]	「生命」

2) 母音調和で、前進的円唇化がない。これに関連して、第2音節以降に長母音 ö, ǒ は現われない。

ハルハ・モンゴル語	オイラト方言	
dolō	dolān	「7」
xödǒ	ködā	「草原」

3) 二重母音がなく、蒙古文語の ayi(aɪ), uyi(uɪ), oyi には、それぞれ ā, ū, ǒ といった長母音(IPA では、それぞれ [æ:] [y:] [ø:]) が対応する。

蒙古文語	オイラト方言	
ayil	āl	「村」
quɪ	xū	「旋風」
oyira	ǒrə	「近い」

4) \*a(\*ā), \*u(\*ū), \*o(\*ǒ) が、後続する母音 \*i の影響で前寄り化して、ä(ā), ü(ū), ö(ǒ) 等の母音として現われる(ウムラウト現象)。

蒙古文語	オイラト方言	
tabi(n)	tāwən	「50」
uri-	ūrə-	「招く」
mori(n)	mörən	「馬」
daɣari	dārə	「鞍傷」
saɣuri	sūrə	「土台」

5) 蒙古文語の k に対応して、閉鎖音の k が現われる(ハルハ・モンゴル語等では、摩擦音の x が対応している)。

ハルハ・モンゴル語	オイラト方言	
xereg	kerəg	「事、用事」
xūxūŋ	kūkən	「少女」

6) 蒙古文語の ě に対しては tš [tʃ] (\*i の前で) と ts (それ以外の位置で) が、また、蒙古文語の ǰ に対しては dž [dʒ] (\*i の前で) と z (それ以外の位置で) が、それぞれ対応している。

	母音 *i の前で	他の母音の前で
ě	tš	ts
ǰ	dž	z
蒙古文語	オイラト方言	

čida-	tšadə-	「できる」
času(n)	tsasən	「雪」
ǰil	džil	「年」
ǰun	zun	「夏」

上の特徴のうち、前進的円唇化については、いわゆる「中世蒙古語」においても未発達であるため、ウラダイーミルツォフ (Б. Я. Владимирцов) は、オイラト方言のこの現象が古風な特徴を保存するものとしたが、これはむしろ、前進的円唇化を経たあと、より新しい時代に円唇の特徴を失う変化(脱円唇化)によってえられた可能性が大きい。

次に、文法・形態的な特徴としては、

1) 名詞語幹末のいわゆる「不定の n」が、主格形で n として現われる。

## 蒙古文語 オイラト方言

ama(n)	amən	「口」
kele(n)	kelən	「舌」
modu(n)	modən	「木」
üsü(n)	üsen	「毛」

2) 独自の複数形接尾辞 -mūd/-mūd を用いる。

ger	「家」	—	ger-mūd	「家々」
bāter	「勇士」	—	bāter-mūd	「勇士たち」
teŋgər	「天」	—	teŋgər-mūd	「神々」

3) 述語となる動詞につく人称語尾がある。

bi	mednā-b	「私は知っています」
tši	mednā-tšə	「君は知っています」
bid	mednā-bdən	「私たちは知っています」
ta	mednā-tə	「あなた方は知っています」

等がある。

語彙上の特徴で注目に値するのは、蒙古文語にあって、他のモンゴル系諸言語には見いだせない一連の単語が、オイラト方言には、それに対応する形がみられることである。

## 蒙古文語 オイラト方言

kümün	kümən~kün	「人」
qamiya	xamā~xā	「どこ?」
keme-	kemā~ge-	「~という」

次のように、オイラト語に特有の語彙も散見される。

ハルハ・  
モンゴル語 オイラト方言

bābcaē	ajū	「熊」
ūdūš	asxən	「晩」
xan	terəm	「包の格子壁」
tōn	xarātšə	「包の天井窓」
xōl	xotə	「食事」

【方言】 オイラト系の言語と諸方言の分布は、概略、次のとおりである。

まず、カルムイク (калмык) とよばれるソ連邦内のオイラト族は、1979年の統計で、総計146,631人、このうちカルムイク語を母語とするのは91.3%である。カルムイク人の約83%にあたる12万2千人が、カスピ海西北岸のカルムイク自治共和国に居住している。カルムイク人は、1630年に、ジュンガリアから移住してきたトルグート族のうち、1771年に、再度大移動してジュンガリアに帰還する際に、同地にとり残された者の後裔である。

ソ連邦内のカルムイク族については、このほか、南ウラルやオーレンブルク (Оренбург) に住む集団や、ブザワ (Buzawa) とよばれるドン (Дон) 川流域の集団、さらに、キルギス共和国のイシク・クル (Иссык-Куль) 湖近くに住むイスラム化したサルト・カルムイ

ク (Sart-Kalmuck) の存在が報告されたことがあるが、それらの詳細は明らかでない。

次に、中国の新疆ウイグル自治区には、1982年の統計で、11万7千人余の蒙古 (モンゴル) 族がいるが、一部、察哈爾八旗の後裔を除いて、ほとんどがオイラト系である。主な居住区は、巴音郭楞蒙古自治州 (蒙古族3万7千人余、主としてトルグートとホシュート)、博爾塔拉蒙古自治州 (蒙古族2万1千人余、トルグートと、一部、チャハル族 Chakhar を含む)、和布克賽爾蒙古自治州 (トルグート) 等である。

中国青海省の海西蒙古族 藏 族哈薩克族自治州には17,682人 (1982) の蒙古族がおり、これは、1637年にジュンガリアから南下したホシュート部で、いわゆる「青海オイラト」の子孫である。甘肅省の肅北蒙古族自治県の蒙古族は、青海省から移住したオイラト (ホシュート部) の末裔である (人口不詳)。

中国内モンゴル自治区西部の額濟納旗、およびアラ善右旗、アラ善左旗の蒙古族も、オイラト系 (トルグート、エルート) として知られるが、言語的には、動詞人称語尾がない等、オイラトの特徴の一部を失い、内モンゴル諸方言との中間的方言として位置づけられる。

モンゴル人民共和国では、オイラト系住民は、西部のホブド、オブス両アイマク (Ховд аймаг, Увс аймаг) を中心に分布し、人口は全人口の10%前後、10数万人程度と推定される。主な部族 (方言) は、次のとおりである (人口は、モンゴル人民共和国の1979年の統計による)。

ドルベト (Дөрвөд)	45,000人
バヤト (Баяд)	31,100人
ザハチン (Захчин)	19,500人
エルート (Өөлд)	8,800人
トルグート (Торгууд)	8,600人
ミンガト (Мянгад)	—

さらに、ウリヤンハイ (Урианхай) は、元来、チュルク系のトゥワ (Тува) 族であるが、アルタイ (Алтай) およびフブスグル (Хөвсгөл) のウリヤンハイは、周囲のオイラト系諸族に同化している。同様に、オブス・アイマクのホトン (Хотон) も、元来、チュルク系であるが、文化的、言語的には、すでにドルベト族と異なるところはない、という。

これら小方言に関しては、調査も不十分であり、資料や記述研究も乏しい。

## 【辞書】

## 〈口語〉

Ramstedt, G. J. (1935, 1976<sup>o</sup>), *Kalmückisches Wörterbuch* (Lexica Societatis Fenno-ugricae III, Société Finno-ougrienne, Helsinki)

## 〈文語〉

Позднѣвъ, А. (1911), *Калмыцко-русский словарь, въ пособіе къ изученію русскаго языка въ калмыцкихъ начальныхъ школахъ* (Императорское Общество Востоковѣднія, С.-Петербургъ)

Krueger, John R., *Materials for an Oirat-Mongolian to English Citation Dictionary* (Part One 1978, Part Two 1984, Part Three 1984, The Mongolian Society, Bloomington)

确正扎甫, 巴德瑪等編寫 (1979), 『蒙文和托忒蒙文對照 蒙語辭典』(新疆人民出版社)

【参考文献】 カルムイク語については、同項目の「参考文献」を参照。

〈中国内のオイラト諸方言〉

清格爾泰 (1979年第1期, 1979年第2期), 「中国蒙古語方言的劃分(上)(下)」『民族語文』(中国社会科学出版社, 北京)

孫竹 (1981年第2期), 「関于国内現代蒙古語的方言劃分問題」『青海民族学院学报』(西寧)

賈晞儒 (1982), 「海西蒙古語的特点」『民族語文研究文集』(青海民族出版社, 西寧)

〈モンゴル内のオイラト諸方言〉

Мөөмөө, С., Мөнх-амгалан, Ю. (1984), *Орчин үеийн монгол хэл, аялгуу* (БНМАУ Шинжлэх Ухааны Академийн хэвлэх үйлдвэр, Улаанбаатар)

Вандуй, Э. (1965), *Дөрвөд аман аялгуу* (БНМАУ Шинжлэх Ухааны Академийн хэвлэх үйлдвэр, Улаанбаатар)

Цолоо, Ж. (1965), *Захины аман аялгуу* (*Хэл зохиол*, 3-р боть, 1-р дэвтэр) (БНМАУ Шинжлэх Ухааны Академийн хэвлэх үйлдвэр, Улаанбаатар)

Лувсанбаддан, Х. (1975), “Торгууд аман аялгууны онцлог”, *Хэл зохиол судлал*, XI боть, 1-24 дэвтэр (БНМАУ Шинжлэх Ухааны Академийн хэвлэх үйлдвэр, Улаанбаатар)

〈オイラト文語〉

Aalto, P. (1964), “Schrift-oiratisch”, *Handbuch der Orientalistik*, I Abt., V Band Altaistik, II Abschnitt *Mongolistik* (E. J. Brill, Leiden-Köln)

Бобровниковъ, А. (1849), *Грамматика монгольско-калмыцкаго языка* (Казань)

Лувсанбаддан, Х. (1975), *Тод үсэг, түүний дурсгалууд* (『トド文字とその文献』) (БНМАУ Шинжлэх Ухааны Академи Хэл Зохиолын Хүрээлэн, Улаанбаатар хот)

【参照】 モンゴル諸語, モンゴル語, カルムイク語, 内蒙古語

(栗林 均)